野呂有子「『エペススの寡婦』・その現代的意義―クリストファ・フライ論覚え書き―」『アポストロス』第 2 号、東京教育大学大学院英米文学会、1975 年、29 - 33.

「エペススの寡婦」・その現代的意義
―クリストファ・フライ論覚え書き―

金窪有子

ペトロニウスの『サテュリコン』の中には、エウモルプスによって語られる逸話がある。淑徳の誉れ高い一寡婦が、亡夫を十字架にかけることによって新しい愛人の生命を救うというものである。

この逸話は、奇妙に人の心を魅きつけるものらしく、バエドラス、ソールズベリのジョン、ラ・フォンテーヌ、ジェレミ・テイラー、その他諸々作家等に語りつがれ、フライの一幕劇『又も不死鳥』に到っている。[1]

本稿のねらいは、源を同じくする他の作品に比較検討を加えながら、フライがこの「エペススの寡婦」[2]をいかに若返らせ我々に何を訴えているかを見るものである。

まず、『サテュリコン』においてこの逸話がどういった情況で語られているかを見よう。

> すると…この現在の平和の生みの親であるウェルプスは、…女と言うものは如何に容易に恋に陥るものであるかとか、…他の男に対する情熱によって完全な狂気に引き込まれぬ程貞淑な女は如何に少[な]いものであるかなどと、色々と女性の移り気に対する罵言を放ち始めた。[3]

そして、一同は「どっと笑いながらこの話を受け取った」のである。中には腹立たしげに、「亡夫の屍を墓の中に戻して、その女を十字架につるすべきだった。」と主張する者もいる。

寡婦の「生きている人を亡きものにするよりかは、死んだ人を役立てたいのです。」という言葉には何の考慮もされず、その場に居合わせた女たちの中にさえも彼女を弁護する

---

[1] 岩崎良三訳『全訳サテュリコン』（創元社、1952 年）によれば「この『エペススの寡婦』の話しは文学的にも良く知られているもので、恐らく印度か中国に起源を有するものであろう。蝶になる荘子とその妻に関する話によく似ている。即ち淑徳の名高い一寡婦が夫の屍を磔架に打ちつけて、新しい愛人の生命を救うという女性の貞操を風刺したもので、Phaedrus; *Cento Novelle Antiche; The Seven Wise Masters*; John of Salisbury's *Policraticus sive de nugis curiarium* にも伝えられ、中世のファブリオでは、 'De la Femme qui se fist putain sur la fosse de son mari 'と題するものとなり、近世ではラ･フォンテエヌの 'La Marton d' Ephese 'やヴォルテエルの *Zaditg* やブラントムの *Dames Galantes* 等にも採り入れられているし、……又チャールズ一世宮廷附牧師ジェレミ･ティラアの *Rule and Exercise of Holy dying* にまで引用されている。･･･劇作家クリストファ･フライのブランク･ヴァースで書いた詩劇 *A Phoenix too Frequent* (1947) もこの話を巧みに一幕にまとめた喜劇であって云々」とある。

[2] ここで「エペスス」と書かれているのは、聖書では「エペソ」といわれている小アジアの古都である。

[3] *Ibid.*, p.169.

ものはいないのだ。つまりこの逸話を、女の移り気への風刺として扱い、ある基準に照らせば女の行為は死にも値するものだとするのがこの場の情況なのだ。

女の移り気への風刺、ひいては人間不信という面からこの逸話を取りあげているのは、アンブロウズ・ビアスである。『悪魔の辞典』において「未亡人と兵士」と題される短い文章では、女の愚かさ、節制の無さが徹底的に嘲笑されている。未亡人の厚かましさは、初心で職務に忠実そうな兵士との対比によって、一層はっきりと浮かびあがってくるのだ。

寡婦の行為をただ風刺するなどという事では飽き足らず、厳しく弾劾し、死をもってそれに報いるといった立場でこの逸話を扱う作家もいる。ソールズベリのジョンによればフラビアヌスという著者はこの話は事実談であると主張し、この女は不信仰、殺人、姦淫の罪をもってエスペス人の集まっている前で罰せられたと付加している。[4]又、『今古奇観』第二十話―荘子休盆を鼓いて大道を成すこと―では、「女は心もうつろになり、恥ずかしさにいたたまれなくなって、腰から刺繍の帯をほどいて梁に掛け首をつってしまった。あわれはかなくも、これはほんとうに死んでしまったのである。」[5]

このような作家達は、女の行為をただ笑って過ごすのではなく、後世への見せしめとして死をもって女を消し去っている。明らかに女の行為を否定している。彼らには、それぞれ生活上の基準となるものがあり、それに照らしてみれば、女の行為は死にも値するものとなるのだ。

これに対して、ラ・フォンテーヌは次のように言う。

> かのペトロニウス先生はどうおっしゃるか知らないが
> （女のしたことは）そんなたいした事じゃありませんから　あなた
> 甥ごさんへの教訓にしようたって無駄ですよ
> その後家さんの間違いといやあただ一つ
> （旦那の後を追って）死のうなんて思いついた事
> 大それたことでもなんでもありゃしない
> それも生きた人間様を助けるためとあれば尚の事
> 生きてる乞食野郎の方が、死んじまった皇帝様より
> どれだけ大事か知れやしない。[6]

彼は「生者よ、栄あれ。生きているうちに楽しみなさい」と、未亡人の行為を弁護し、それを積極的に肯定してさえいるのだ。ここで風刺の対象になっているのは、貞淑ぶってはいるが実は浮気な女の姿といったものではない。自然の摂理に反する人間の行為、死を

---

[4] *Ibid.*, p.277.
[5] 抱甕老人、千田九一、駒田信二訳『古今奇観』(3)（平凡社、1966 年）p.123.
[6] La Fontaine, *Contes st Nouvelle en Vers*, (Paris: Classique Garneer, 1961), p.345.

自ら望んだり、世間がそれを強要したりといったことこそ彼が風刺の対象としているものなのだ。

このように見てくると、「エペススの女」が語られるその背後に、少なくとも三つの側面があることに我々は気づく。それを今ここに整理してみると、おおむね次のようになるだろう。

（1）　女性は移り気なものであるという一般的な見解に基づく立場
（2）　社会の掟に従って秩序を守り、それに違犯するものに処罰するという立場
（3）　自然の摂理に重きを置き、それに従って生きるのが良いのだとする立場

（2）と（3）は明らかに対立するが、（1）はそうではなく、それのみが強調されたり、（2）や（3）と結びついたりして、逸話の種類やその物語性を複雑にしていると考えられる。（1）が特に強調されているものとしては、『サテュリコン』や『悪魔の辞典』、（1）と（2）が結びついたものとしては、『今古奇観』やソールズベリのジョンの話、又、（1）と（3）が結びついたものとしてはラ・フォンテーヌを掲げることができるであろう。

それでは、フライの場合、『又も不死鳥』の場合はどうだろう？

舞台は未亡人ダイナミーニが女中のドートと共に、夫の墓の中で断食している所から始まる。登場人物は三人、先に掲げた二人と兵隊であり未亡人の恋人となるティーギアス（クロミス）である。泣きつかれて眠るダイナミーニのかたわらでドートは、うっかりと本音をもらす。

> ほんとを言えば、お墓の中でこれ以上のまず食わずで泣きくらすくらいなら、長ぐつをはいている禿の養蜂家とでも眠った方が、なんぼかましか知れやしない。あら、こんなこと言っちゃって。私は何も言わなかった事にしよう。[7]

この女中には死ぬ気なんかありはしない。ただ旺盛な好奇心によって、女主人について墓場に来ているだけなのだ。自分では、はっきりと意識していないが、一つの経験として死をのぞき見ようとする彼女の言動には、その意識のずれから来る滑稽さが溢れている。

> 私も、もう少し悲しんでみることにしよう。だけど大声を出して長い事それをやりとおすのには、練習が必要ね。ああ、あの男達の一人でもいいから、笑わずに

[7] Christopher Fry Plays: *A Phoenix Too Frequent; Thor with Angels; The Lafy's Not For Burning*. (London; Oxford University Press, 1969), p.7. 以下の引用はすべて同書による。尚、引用訳文の内、特に註のないものはすべて拙訳になるものである。

> 思い出すことはできないかしら。ダメ、こりゃ絶望的だ。そうそう、私が考えもなしにあげちまった、あの素敵なくつ。あれならいけそうだわ。でも私、あのくつの事ではもうたっぷり泣いちまったしねえ。おお、気の毒な奥様、旦那様。(p. 12)

女中の、死を前にしてこの滑稽さ、ちぐはぐさを通して、フライは死を望む事の愚かしさを我々に呈示している。悲しみの余り死のうが笑い死にしようが自然の摂理に反して死ぬのが愚かしいという事では何ら違いはないのだ。

更に、兵士の愛を受け入れて、晴れ々れと心の内を語るダイナミーニに目を向けてみよう。

> 私は前からそこにいたのよ。あなたの腕の中に。私のからだは、ただ、あなたを捉えていた私の思いを後からおいかけて来ただけ。ああ、これで私は又、一つのものになれたわ。（p. 38）

> ああ、私のすべてがあなたの中のすべてを恋焦がれている。私の哀しみ、私のクロミス。これで私は創造の化身になるのだわ。（p. 38）

彼女の言葉は、素朴で率直であり、その内には精神と肉体の調和、それに基く生命への力強さを見る事ができる。そしてこの力強さは、恋人の危機にあって、遺憾なく発揮されるのだ。盗まれた死体の代りに、亡夫の遺体を吊るそうという提案に、兵士は「とんでもない事だ。」と反対するが、彼女は言う。

> ちっとも分かってないのね、あなたは。私は彼の生命を愛したのであって死体を愛したんじゃないの。そして今、私達は彼の死体に生命力を吹き込むことができるのよ。ちっとも恐ろしくなんかないわ。素晴らしいことよ。そうでしょう？夫が再びこの世界で私達の幸福を祝って動くのを感じられるだなんて。それは私が悲しんだってどうにもならない事をどうにかしてくれるんですもの。・・・・・・・・・愛しい人、あなたにヴィリリアスをあげましょう。（p. 49）

芝居は、この後、登場人物三人が祝杯をあげる所で終わっている。この未亡人が、世間からどう見られたか、処罰されたかは我々の関知し得ない事であるし、又、フライの関知するところでもない。ただ自然の摂理に反する事の愚かしさと生命の力強さだけは心に焼きつくものである。夫人の死体の扱い方が非道いと見る人もいるだろうが、それはダイナミーニの次の言葉が解答となるだろう。

> 見せかけと本質とは余りにも違いすぎる。ただ見物しているだけの人には狂気の沙汰と見えても、実際それを経験している人にとっては叡智の賜だっていう事は良くあることなのだ。（p. 37）

ダイナミーニの行為を女の浅知恵として笑う者は笑えばよい。しかし一見グロテスクに見えるこの行為は、血も流さず誰にも迷惑もかけずに一つの生命を救う唯一の方法なのだ。ここに到って我々はフライがラ・フォンテーヌの延長線上に位置するものと考える。彼は、先に掲げた側面のうちの（１）と（３）を結びつけ、特に（３）を強調している。すなわち、女性が移り気であることは認めながらも、それを攻撃の対象とするのではなく、それはそれで構わないとしている。大事なのは自然の摂理に従って、生をまっとうする事なのであり、それを阻むものこそ攻撃されるべきなのだ。それでは、『又も不死鳥』において具体的にフライの攻撃目標となっているものは何であろうか。

我々の頭にまず思い浮かぶのは、ダイナミーニが夫の後を追って殉死しようとしていたという事であり、ティーギアスが恥ずかしめを受けて死ぬくらいならば、誇りをもって死のうとしていたという事だ。

> 運命の女神達はなぜさっさと私に名誉ある死を遂げさせてはくれないのかしら？きっと極楽では名誉なんてものには飽き飽きしてるんだわ。（p. 37）

と、ダイナミーニは叫び、

> 後生だから、ダイナミーニ、僕を人生の高みで死なせておくれ、それも、僕が誇りをもって死ねるようなやり方でね。（p. 46）

と、ティーギアスは哀願する。殉死の愚かしさをダイナミーニに説いた彼が愚かしき自殺によって名誉を守ろうとするのだ。これが皮肉でなくて何であろうか。フライが風刺しているもの一つには、この名誉ある死といった古典的英雄主義がある。自殺の名誉性というキリスト教以前の考え方は、現代人にとって風刺の対象としてはかっこうのものとなるだろう。極楽だけでなく我々の世界でも、もはや名誉なんてものには飽き飽きしているのだから。

しかしフライの本当の攻撃目標は、ギリシャ的英雄主義を超えた所にあるものだ。それは、手短に言えば、進歩を自負する人間達の愚かしさに他ならない。彼は、進歩の意味を、登場人物の言葉を借りて我々に問うている。ダイナミーニは言う。

> けれども、一体全体、神々がオリンポスに生まれた時から、私達（人間）はどれだけ進歩してきたと言えるのかしら？（p. 28）

そして又、ティーギアスも。

ねえ、教えておくれ、前進という語についての君の意見を。例えば、そんなものは本当
にあるのだろうか？後退を伴わない前進なんていったいあるのだろうか？だったらより
正しくいうなら人類は絶えまなく動いてきたというのが本当じゃないんだろうか？
（p. 31）

愛の為に死のうとするダイナミーニに殉死の愚かしさを説いてきかせたティーギアスは名誉の為に自殺を選ぼうとする。そして彼らの行為の内に、前時代的英雄主義を認めて笑った現代人は、イデオロギーの為に、自由の為にと言いながら、大戦において大量の生命を犠牲にしてきたのだ。自然の摂理に反して、人工的に死ぬという点で、彼らと現代人との間には一体どれだけの差があるというのだろうか？否、他人を巻き添えにしないだけ、まだ、彼らの方がましなのではないだろうか？

進歩を自負する人間の愚かしさ、それをあます所なく露呈したのが、第一次、第二次大戦である。幼年期に第一次大戦を経験し、第二次大戦では戦役拒否者として非戦闘部隊に四年間勤務したフライにとって、その愚かしさを風刺する事は、終生変らぬテーマとなるであろう。